

世界びっくりトイレ事情——世界に誇る日本のトイレ文化

いつも文化の香る本欄（ホントかな？）に尾籠^{びろう}な話しで恐縮ですが、なにせ「食べる」と共に「排泄」は人間が生きるのに絶対的に必要なもの。その施設「トイレ」の話題です。かつて”日陰者”“だったトイレも、今では企業も自治体も集客のために力を入れるようになって”日なた者”“になってきています。

「薄暗い」「臭いがする」「汚い」・・・と言われていたトイレがこの30年ほどで大変化を遂げています。特に近年のJRの駅トイレ。清掃も行き届き「大」「小」の器も光るほどにきれいになっています。また新潟県見附市の道の駅「パティオにいがた」では、トイレを建物の中心に配置し、魅力的な空間作りにこだわり、おむつ替えベッド、パウダー（化粧）コーナーなどの設備も充実、壁材には県産材の「越後杉」を使用し、観光づくりにも工夫を凝らしている。「トイレからの街づくり計画」といったところのようなのです。

一般家庭では温水洗浄便座の普及でしょう。ある調査によれば、国内の2人以上世帯への普及率は80%を超えている、といます。こんな便利で快適なものを世界がほっておくわけがない。映画「タイタニック」の俳優デカプリオが来日した際、帰国の一番のお土産はこの洗浄便座だったと、英会話の参考書でも紹介しています。海外からの旅行者が買い求めていくことも多い。そう、日本は世界に誇る“トイレ文化の先進国”なのです。



「世界」が出てきたところで、私が文学紀行で回った国々のトイレ事情の一端を紹介してみましよう。まず「ロミオとジュリエット」の舞台のあるイタリアです。ちょうど10年前の訪問なので少し状況は変わっているかもしれませんが、日本とのあまりの対比に「イタリア最近トイレ事情」とのエッセイもまとめたのです。ポイントはトイレの数が少ないこと、あっても壊れていることが多いこと、公衆トイレはどこでもチップが要求されること・・・等々。臨場感にあふれた2ページにわたる面白いレポートです。この文の最後に付けたので是非お読みになってみてください。

アメリカの空港などではトイレの仕切りドアが床から高く、便座に座っている足や置いてある荷物が見えてしまい、こちらは無防備状態のドアの下から抜き取られるのではないかと、といったような心配も湧いてきます。



デンマークとオランダの空港ではちょっとした“悲劇”を味わいました。両国とも背の高い民族です。そのせいか放尿する朝顔の位置もずいぶん高い。身長160センチで短足の私はそのままでは届かず、つま先立ちで用をたさねばならなかったのです。

3年前のインド訪問の際にはガイドブックに「トイレ用のティッシュを必ず持参すること。ホテルを除きペーパーを備え付けていないのがほとんどだから」とありました。しかも「インド人は用をたした後は左手で水を使い尻を洗う。だから握手や物を受け取るのは右手。左手は不浄とされているから」といった記述までありました。幸いそんな場面への遭遇はなかったのですが、世界にはいろんなトイレ文化があると思ったところでした。

イタリア最近トイレ事情

2009年11月記

歴史遺産そして芸術と美食の国イタリア。ピザ、スパゲッティ、ワインを味わいながらの楽しい旅でしたが、一つ、とても困ることがありました。それはトイレです。「イタリア人はみんなウンコをしないんか？」なんて冗談めいた疑問まで出てきます。私も「トイレ学者」でもなく、全国の実態調査をしたわけではないので、以下の記述は決して正確とは言い切れません。グループ旅行でたった1週間のイタリア滞在の間に私の目に映った事実と印象です。偏見があるかもしれません。

でも、「海の水が塩っからいのを知るのに、太平洋の水を全部飲まなければならぬということはない」との言葉もあります。食事とともに人間が生きていくための最も大事な営みの一つ——この“用を足す”という営みに、ことのほか気を遣わざるを得なかったからです。



以下は、思い出すままに綴った見聞・体験記です。

- まず、どこに行ってもトイレの数が少ない。空港でもレストランでも観光地でも。到着したミラノの空港。バゲッジクレームの場で自分のトランクが出てくる間に、フロアの端にあるトイレに小用で駆け込んだ。二つの仕切りのある扉を押し入ってみて驚いた。男性用の「小」用は一つのみ。「大」用に二つあっただけだった。早く済ませて次の人に、と力んでも、衰れなるかな、高齢からくる前立腺肥大の傾向があり小用でも時間がかかる。そのときは、自分の後には一人だけで助かった。もし大勢が一列に並べられたらどうなるだろうか、と一瞬思ったものだ。
- このトイレの件では食事の前や移動の際、ガイドが口をすっぱくして強調していた。「バスに乗る前に必ずトイレを済ませておいてください！レストランでもトイレは男女一つずつしかありません。私たちのグループ30人あまりの人が食事を終わって一斉にトイレに行ったら、仮に1人2分でも1時間かかってしまいます。次のスケジュールに間に合いません。どうか皆さん、食事中でも頃あいを見はからって、遠慮なくどんどん行くようにお願いします」
- 一部を除いて、全体的にどこもあまりきれいではない。設備も古い型だ。近年、JRの駅のトイレがずいぶん近代的できれいになっており、また各家庭にウォッシュレットなどが普及している日本から訪れると、ルネッサンスの発祥地イタリアに来て、なんだか半世紀ほど昔に戻ったような感じになる。一方で、ホテルの便器の隣には日本にはないビデがある。かつて、ここで顔を洗った日本人旅行者がいた、なんて笑い話が語られたこともあるが……。ガイドの説明によると、実はウォッシュレットの淵源はこのビデだという。ただイタリアでは水質が違い（石灰質が多い）ノズルが詰まってしまうため適用されていないのだという。
- 便座が壊れ、あるいは盗まれてしまっているもの、ドアの鍵が壊れてしまっているものもある。帰途のローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ空港の出発ロビーの男性用トイレ。大用が7つあった中で3つが壊れていた。一つはドアのノブが回らず出入りができない、一つは入って閉めるとロックが壊れていてドアが開まらない、一つは誰か使ってい

るわけでもないのにドアが閉まっていて開かない。便座は見た限りではすべてにあった。でも、もし便座のないトイレだったら、みんなどのようにするのだろうか？「そんなのは立ったまましゃがんで工夫するのさ！」「いや、その上に乗ってしゃがむのさ！」なんてグループ仲間の気軽で無邪気な発言もあったが・・・(申し訳ありません。クサイあまりにも生々しい会話で)

- ▶ 用を足した後、水を流すレバー、ボタン、踏み板などの位置と形が実に多様なこと。日本のように便座の後ろか横にレバーのあるものから、ボタンを押すもの、引っ張るもの、ペダルを踏むもの等、その大きさやデザインも多種多様。なかにはどこにあるのか、さんざん探さなければわからないものもある。ベネチアのホテルでは、1位20位ほどの高さに水タンクとボタンがあった。大の用を足しているときには、背の低い人はやっている途中で立ち上がらなければならない。これでは小さな子供たちはどうするんだろう、なんて素朴な疑問がわいてきた。
- ▶ 公衆トイレのほとんどが有料である。ハイウェイのドライブインでも同じ。使用料というのだろうか、それともチップといった方がよいのだろうか。ちなみに料金は訪れたミラノ、ベローナ、シエナ、ローマ等の都市では大部分が1回50位(約70円)だった。雨のそぼ降る夕方、「ロミオとジュリエット」の舞台ベローナ市の広場にある公衆トイレに入った。地下1階に入っていくと、劇場の入場券売り場のような受付があり、窓ガラス越しに料金を支払うようになっていた。2月に訪れたエジプトの観光地では、トイレの出入り口に、汚れた札束を手にしたむくつき男が立っていてチップを請求していた。お釣りを受け取るのさえためらうような衛生状態だったことを思えば、まだこちらの方がすっきりはしている。
- ▶ 水の都ベネチアでは、たった200cc前後(人によって違いがあるが)の水を体内から排出するのに2ユーロ(約280円)も払わなければならなかった。生理現象とはいえ、何回も利用したら結構な額になる。ここで、イタリアを訪れる旅行者が、ホテルの外で1日に何回、用を足すか、そのチップの合計額を想像してみるとよいだろう。トイレが近い私自身も、ときどき小銭がなくなって当惑することにも直面した。イタリアでは予想外に小銭が必要なのを身をもって知らされたものだった。
- ▶ ついでにもう一つ。これは私自身に“責任”があるものだが・・・。「小」をやるときの朝顔が“放水”の位置ぎりぎりまで高いのがまれにあったことだ。かつて北欧の空港に寄ったとき、朝顔の位置があまりに高く、つま先立ちをしながら用を足したことがある。男性の平均身長がたぶん180センチに近い長身の北欧の人々に比べて、日本人の中でも短足の自分の悲哀である。イタリア人は北欧ほどではないから助かったものの、こんなトイレも時にはあることを、これからイタリアを訪れる日本人の参考までにご報告しておきたい。

——以上、一旅行者として体験です。大好きになった、またお世話になったイタリアの悪口を言うつもりは毛頭ありません。素晴らしい歴史遺産をもつ観光大国のイタリアが、観光客の印象をさらによくするための参考になれば、との願いを込めて綴ったことをご理解ください。この機会に、未開民族も含めた世界のトイレ文化の研究も意義ある貴重な仕事、どなたか取り組んでくれたら面白いだろうナ、なんて思った次第です。